

2024年度 玉川学園中学部 入学試験問題

第1回

国語

- ・ 試験開始までこの問題冊子を開いてはいけません。
- ・ 答えは必ず解答用紙に記入下さい。
- ・ 字数制限のある記述問題の解答では、句読点・記号なども一文字分として数えます。

受験番号	E				
------	---	--	--	--	--

氏名	
----	--

【一】 次の——線部のカタカナを漢字で答えなさい。また、必要があれば、ひらがなで送りがなを付けて答えなさい。

- ① セイジツな態度。
- ② 知人の家をホウモンする。
- ③ おそろしいギョウソウ。
- ④ 座席がアク。
- ⑤ ムズカシイ問題。
- ⑥ キュウキュウ車が走る。
- ⑦ パーティにシヨウタイされた。
- ⑧ 相手のツゴウをたずねる。
- ⑨ 事前のジュンビが大切だ。
- ⑩ モメン系で、ぬう。

【二】 次の——線部の読みを、ひらがなで答えなさい。

- ① あれこれ思案する。
- ② メロンが熟れる。
- ③ 森林浴をする。
- ④ 武者修行をする。
- ⑤ 時候のあいさつをする。

【三】 次の熟語と同じ構成の熟語を、ア～オの漢字を使って二組作った時に余る漢字を記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 古着 | 〔ア | 海 | イ | 友 | ウ | 新 | エ | 深 | オ | 親 | 〕 |
| ② | 貯金 | 〔ア | 人 | イ | 読 | ウ | 着 | エ | 求 | オ | 火 | 〕 |
| ③ | 国連 | 〔ア | 急 | イ | 割 | ウ | 特 | エ | 学 | オ | 車 | 〕 |

【四】 次の五つの語句を、五十音順にのる国語辞典で調べると、どういう順に出ていますか。早いものから順番に記号を並べて答えなさい。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ① | ア | 落花生 | イ | 漁師 | ウ | 海女 | エ | 落語 | オ | 漁船 |
| ② | ア | 都合 | イ | 都会 | ウ | 都市 | エ | 都度 | オ | 登山 |

〔五〕 次の文から漢字のまちがいを一文字探し、ぬき出して正しい漢字に直しなさい。

〈例〉 クラスが団結することを気待している。

気 ↓ 期

- ① 休日、学校の扉とびらの解放は禁止されている。
- ② 追い込まれて、絶対絶命のピンチだ。
- ③ この地域には、人口的に造られた美しい庭園がある。

〔六〕 それぞれの□に漢字を入れると、慣用的な表現になります。①～③の文の□に当てはまる漢字一文字を答えなさい。

- ① 遅刻しそうだったので、教室まで走ったら□が切れた。
- ② きっかけをつかんで、うまく□に乗った。
- ③ あんなことを言われたら、今さら謝られても□の虫がおさまらない。

〔七〕 次の——線部は、文の成分の何に当たりますか。語群から選び、それぞれ記号で答えなさい（記号は何度使ってもかまいません）。

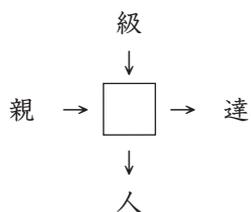
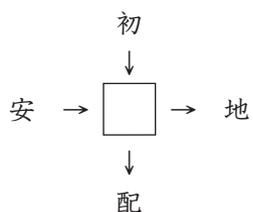
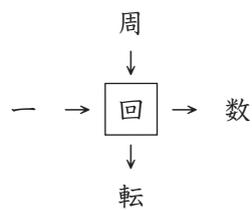
ぼくの①弟も、②野球がとても好きです。③だから日曜日にはよく二人で⑤公園でキャッチボールをします。

語群 ア 主語 イ 述語 ウ 修飾語

エ 接続語 オ 独立語

〔八〕 四つの二字熟語が出来るように、□に当てはまる漢字を答えなさい。

〈例〉



〔九〕 ①～⑧の——線部の表記・表現で、正しく使われていないものを

全て選び、番号で答えなさい。

- ① 先生はおもむろに急いで教室を出られた。
- ② 校長先生が朝会で話された。
- ③ どうしてこんな答えが出てくるのか。
- ④ 彼は全くすばらしい友人です。
- ⑤ 兄は坂道をへりくだっていった。
- ⑥ 会長が美術館の絵画作品をご覧になる。
- ⑦ どうぞご遠慮えんりょなさらずに、いただいでください。
- ⑧ こんにちわ。今日は天気がいいですね。

【十】 次の【I】と【II】の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【I】

これから自分が生きていくとき、何が起こるのかは、現在の時点でまだ誰にもわからない。東日本大震災のとき、原発事故が起こった。そこでは「想定外」という言葉が頻繁に用いられた。

私たちのこれからの時間、将来の人生に起こることは、すべて想定外のことなのである。想定外の事態を、なんとか自分だけの力で乗り越えていかなければならない。生きることはそういうことである。

運動をするにはそれなりの基礎体力をつけなければならないのと同様に、これから何が起こるかかわからない想定外の問題について自分なりに対処するためには、それなりの体力が要求される。私はそれを「知の体力」と呼んでいる。

a それは知識の習得である以上に、どう考えればその場を乗り切れるのかという、考え方の訓練なのである。知識を持っていることは、もちろん大切なことであるが、それは弾力的な知識でなくては、実際の応用には役に立たない。単に教科書に書かれている通りに覚えている知識では、自分が現場で出くわした初めての体験にそれを応用するには、まだ硬すぎるのである。

知識を解きほぐし、応用可能なまでに自由に伸び縮みできるようにするために、その知識が、どのような多くの人々の試行錯誤のもとにもたらされたものなのか、それが作り出されたプロセスを知り、その知が

カバーできる外延をなぞり、かつその知によって自分のすでに得ていた知の体系が再構成されることが必要であろう。

「自分ならどう考えるか」というときに、それまでに先人たちがどのように考えてきたかを学ぶことは、具体的に何かの役に立てるという勉強以上に重要な意味を持っている。「生命」というものについて、どのような見方が交錯し、次第にその真理に近づいていったかについては、のちに少し詳しくみることにするが、われわれが疑うこともない常識としての知も、それが確立するまでには、さまざまな見方からアプローチする人々によって、たゆまぬ議論と反証が重ねられ、揺れながら、ゆっくり醸成されていったものなのである。それをつぶさに知ることは、もの見方の多様性を知ることになる。そのような視点、視角の多様性を自らのものとして持っていることは、1として必須のことなのである。

本来の勉強というものは、あるいは学問というものは、何かのためにするものではないのだろう。具体的に何かを解決するためにという目的のはっきりしたものは学習であり、学問とは学んで問うもの。何かの解決のためのものではないと思いたい。具体的な問題の解決のためにする勉強もあっていいが、具体的な目標を設定しない、もつとはるかに遠い未来に漠然と何かの役に立つ勉強もあり、それが学問というものである。

私の講義では教科書をつかわないと先に述べた。そのもつとも大きな理由は、「わかっていること」を教えるよりは、「わかっていないこと」を教えることこそが、大学における教育、講義の本来の姿だと考えるからである。「まだわかっていないこと」を学生諸君に紹介し、それがな

ぜまだわかっていないのかを説明する。その「なぜ」に興味を持ってもらうことこそが、大学教育の本来の姿、学問をすることの第一歩であると思っっているからである。

教科書は便利でよくできており、必要な知識はほぼすべて漏れなく収録されている。しかし、教科書には唯一、書かれていないことがある。それは「わかっていること」である。「わかっていること」は必要十分に網羅されているのが教科書だが、教科書には、唯一、「まだわかっていないこと」は書かれていないのである。当たり前のことである。

私の専門は理系なので、どうしてもそちらの教科書を中心に考えることになってしまいが、高校までの教科書を注意深く読んでみても、知識の先端にあつて、これはまだ明らかでないという部分をわざわざ取り上げて、そのわからない理由や、いくつもの理論があつて定説がないなどという部分をクローズアップしている教科書は、たとえばあったとしても例外的であろう。多くは、すでに「わかっていること」が整然と述べられているのが教科書である。

すでに「わかっていること」を習得、すなわち学習することも大切であるが、より大切な学びは、すでに「わかっていること」のすぐ横には、まだこんなに「わかっていること」があるのだということをもつて示すこと、気づいてもらうことではないだろうか。

もちろん「まだわかっていないこと」をわかっただけのためには、「わかっていること」を知っているということが前提になる。「だから、仕方がないから教科書に書いてある内容も講義するけれど、しばらく我慢して

聞いてほしい」と言つて、いわゆる講義もしなければならなくなる。しかし、わかっていることをしっかり理解してもらうことは、わかっていることを知るための前提という位置づけである。何人かに一人の学生が、そんなわかっていないことばかりの世界に魅力を感じて、研究者への道を進んでくれればというはかない望みを持ちながら、講義をしているのである。

わかっている事実の山のような集積を見せつけられたら、誰もその上になんか何かを築こうなどとは到底思えないのだが、「わかっている」と思つていたことのすぐ横に、こんなことさえもまだわかっていないのかと知ることは、それなら自分でも何とかその問題、課題の解決に参加できるかもしれないと思わせる契機になるだろう。受動的な学習から、**2** な学問へのシフト^{*}は、まさにそんな「ひよっとしたら、自分でも」**2** に考えることを外しては起こり得ないのである。

【II】

学校で習った知識は、その後、どのように実際の生活の中で活かされているだろうか。

漢字の読み書きは日常生活で必須の能力になるし、掛け算や引き算は買い物などで無意識に役立っているだろう。小学校までの学習は、日常生活のなかで使う機会がふんだんにあるように思われるが、**5** 中学、高校と進み、そこで得た知識は、生活のなかで引き出されて活用されるというよりは、どうも引き出しの中、あるいは本棚の奥にしまわれたままで、

試験のときにしか顔を出さないものが多いような気がする。

私たちの研究テーマの一つに、コラーゲンがある。コラーゲンの合成に必須の新しい遺伝子を発見したことから、コラーゲンが異常に蓄積する肝硬変などの治療をにらんだ研究を長く続けている。(中略)

新聞広告などで、若さを保つため、肌をいきいきさせるためと称して、コラーゲンをサプリメントとして摂るといふ広告が目につく。これが生物学的に見て意味のないことであることは、高校の生物の知識さえあれば十分なのである。

コラーゲンはタンパク質である。タンパク質は20種類のアミノ酸の並んだもの。私たちがタンパク質を摂取するのは、体内で、すなわち細胞内でタンパク質を作るための原料であるアミノ酸を補給するためである。肉や魚、鶏卵などの動物性タンパク質、大豆などの植物性タンパク質を食べると、それらは胃で分解され、小腸で最終的にはアミノ酸やアミノ酸が数個つながったペプチドにまで分解されて吸収される。そのようにして吸収したアミノ酸を用いて、私たちは体内で必要としているタンパク質を「一から」合成するのである。(中略)

タンパク質を作り続けるために、アミノ酸が常に必要であり、そのために肉をはじめとするタンパク質食品を摂らねばならない。

なかでもコラーゲンは私たちの全タンパク質の3分の1を占め、体内ではもっとも多いタンパク質である。骨の主成分であるばかりでなく、皮膚の内側にあつて肌の張りを支えているのもコラーゲンである。女性にとつては特に気になるタンパク質だろうか。残念なことに、このコ

ラーゲンの合成量は老化とともに減少する。これが歳をとると皮膚がたるんだり、皺ができたリ、張りがなくなったりする理由のひとつである。だからお肌の若返りのためにコラーゲンを飲みましよう、食べましようというのが、サプリメントである。

「a」、飲んだり、食べたリしたコラーゲンが、そのままコラーゲンとして肌の張りを支えてくれるかという点、それはあり得ない。「b」コラーゲンも他のタンパク質と同様に、胃や腸でアミノ酸やペプチドにまで分解されてしまうからである。コラーゲンを分解してきたアミノ酸は、一部はコラーゲンの生成にも使われるだろうが、他のタンパク質の合成にも当然用いられる。「c」コラーゲンを摂ったからと言って、コラーゲンだけが増えるわけではないのである。

これは高校ではもちろん、中学でも習う生物学の基礎である。その知識があれば、敢えて高い金を払ってサプリメントを買うよりは、うまい肉を食つたほうがはるかに理にかなつていて、私などは思つてしまふ。もっとも信じればなんとかで、コラーゲンを摂取することで若返ると信じて幸せになるのであれば(これをプラセボ効果と言う)、それに敢えて異を唱えることもないわけだが、ここで言いたいのはもう少し別の観点である。

コラーゲンを愛飲している多くの女性も、かつては先に述べたような生物学の基礎知識は学習したはずである。「d」、それらは引き出しの奥にしまわれていて、実際の場面では顔を出さない。勉強するといふ場が、それを活用する場から乖離してしまつていく。「e」、情報

が知識として活用される場を想定しないままに、単なる情報として教え込まれているという言い方もできるかも知れない。

勉強するとういう場合は、単に情報を詰め込むだけ。その出口は試験問題の解答の場面だけと、生徒も教師も漠然と考えてしまっているのではないだろうか。試験の問題になら答えられるが、現実生活のなかで、本来、その知識が活用されて然るべき場で、かつて覚えた知識が顔を出さない。学校で習ったことは、学校でだけ意味があるという暗黙の了解があるからである。

そのような引き出されることのない情報は、果たして知識と言えるのだろうか。インプットされた情報は、現実の場面で引き出され、活用されてはじめて意味を持つ。しまわれたままの情報は、価値としてはゼロである。その活用とは、必ず現実の場面での「応用」として、もとの形から何らかの変換を通して、あらわれるはずである。教わったままの情報も、そのまま活用されるという機会はほぼ皆無である。当然であろう、学校で習う時間で、実生活の様々なバリエーションをカバーできるはずがない。

インプットされた一次情報にどのような係数をかけて、実際の場面で応用可能な情報に置き換えるか、それが知識の活用ということに他ならない。先に書いた「知の体力」とは、そのような現実の場で応用可能な情報活用の基礎体力のことであった。(中略)

現在の学校教育は、教え込むというインプットにあまりにも重心がかかり、それを引き出すというアウトプットへの訓練にかける時間が少な

すぎるように思えてならない。タンパク質はアミノ酸の並んだもので、これをポリペプチドという言葉で呼ぶと教えるとき、ちょっと寄り道をして、食事におけるタンパク質の摂り方、それがどのように利用されるかなどについての日常生活に密着した雑談があれば、その知識は必要なときに顔を出すものなのである。仕舞われたままで、アウトプットの方法を持たない情報は、決して知識としての価値を持たないという以外はないだろう。

一方で、私には、大野晋氏の次のような言葉も強く記憶に残っている。大野晋氏は岩波古語辞典の編集や、古代日本語は古代タミル語を起源とするという説を唱えるなど、日本語の研究者として多くの研究を残してきた学者である。大野氏の著書に『日本語練習帳』（岩波新書）がある。ちょっと長くなるが、味わい深い文章なので引用しておこう。

「語彙が多いとか少ないとかいうけれど、人間はどのくらいの言葉を使うものなのか。

例えば新聞や雑誌に使われている単語は、年間およそ三万語といわれています。しかし、その五〇〜六〇パーセントは、年間の使用度数です。つまり、半分の単語は新聞・雑誌で一年に二度とお目にかかることがない。(中略)

生活していく上で間にあうという数でいえば、三〇〇〇語あれば間にあう。だいたいは生きていられる。これが、いわゆる基本語です。では、三〇〇〇語知っていればいいのか。言語生活がよく営めるには、

三〇〇〇では間にあわない。三万から五万の単語の約半分は、実のところは新聞でも一年に一度しか使われない。一生に一度しかお目にかからないかもしれない。しかし、その一年に一度、一生に一度しか出あわないような単語が、ここというときに適切に使えるかどうか。使えて初めて、よい言語生活が営めるのです。そこが大事です。語彙を七万も一〇万ももっていたって使用度数^⑨、あるいは一生で一度も使わないかもしれない。だからいらぬのではなく、その一回のための単語を蓄^{たくわ}えていること」

先に私は、現実の場で応用できない知識は、知識としての価値がないと言った。その考えは変わらない。しかし、知識というものは、それが役に立つことだけを前提として、学ばれるものではないだろうと思う。

^⑩役に立つから学ぶというのではなく、大野晋氏の言うように、一年に一度どころか、一生に一度使えれば上等、ひよっとしたら一生使えない情報もあるかもしれない。しかし、そんな一生に一度あるか、なしかの可能性を前提としたうえで、情報を溜^ため込むことは、自分の自信となるはずである。

いざというとき、世界に^{＊たいじ}対峙する語彙あるいは情報を持っているかどうかは、自らへの信頼感に直結し、世界への対応の仕方を決める。積極的に立ち向かえるか、消極的にしり込みするかを決める要素になるはずである。

学ぼうとする知識を役に立つか立たないかという軸^{じく}でのみ見ようとする

と、あらかじめ想定した場面においてしか、その知識は威力^{＊いりよく}を發揮しないものである。大切なことは、何か現実世界で問題が起きたときに、自分が持っている知識、情報の総体を動員して、その局面にどうしたら対処できるのかを、常に考えること以外ではないだろう。そういう場に直面したとき、どのように自分の知の片々^{へんぺん}を動員して乗り切れるか、「知の体力」とはまさにそのような、知の活用の仕方、動員の仕方を言うのである。

(『知の体力』永田和宏〈新潮新書〉による)

〈注〉

- * 外延……………ある記号(言葉)の指し示す対象の範囲^{はんい}。具体的にどんなものがあるかを指すもの。
- * 交錯……………いくつものが入り交じること。
- * 反証……………相手の主張がうそであることを証拠^{しやうこ}によって示すこと。
- * 醸成……………ある状態・気運などを徐々に^{じょじょ}につくり出すこと。
- * つぶさに……………もれなく。こまかく。
- * 網羅……………残らず取り入れること。
- * 契機……………きっかけ。動機。
- * シフト……………移動すること。
- * 乖離……………結びつきがはなれること。
- * 皆無……………全然ないこと。
- * 対峙……………向き合って立つこと。
- * 威力……………他をおさえつけ服従させる、強い力や勢い。

(1) — 線部①「そういうこと」の具体的な内容が書かれている一文を文中から見つけ、その最初の五文字をぬき出しなさい。

(5) — 線部④でなぜ筆者はそのようなことを大事だと考えているのですか。【I】の文中の言葉を使って四十文字以上五十文字以内で答えなさい。

(2) — 線部②「それ」が指している内容・意味と共通しているものを文中の~~~~線部a eの中からすべて選び、記号で答えなさい。

(6) 2に入る言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(3) 1に入る言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 強制的 イ 画一的 ウ 流動的 エ 利己的 オ 能動的

ア 多角的な未来への反省 イ 想定内の過去への反省
ウ 想定内の未来への対応 エ 想定外の現実への対応
オ 体系的な過去への確立

(7) — 線部⑤のように筆者が考えるのはなぜでしょうか。その理由に当てはまるものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

(4) — 線部③「学問というもの」はどういうものであると筆者は考えていますか。【I】の文中から二十文字以上二十五文字以内で見つけ、その最初と最後の四文字をぬき出しなさい。

ア 勉強するという場が知識を活用する場から乖離せず、情報を詰め込むだけになっているから。
イ 詰め込まれた情報の出口は試験問題の解答の場面だけと、生徒も教師も漠然と考えているから。

ウ 詰め込まれた情報を試験の問題でも答えられるだけでなく、現実生活のなかでも活用できるから。

エ 学校では情報が知識として活用される場を想定しながら、教えられていないから。

オ 学校で習ったことは、学校でだけ意味があるという暗黙の了解があるから。

(8) — 線部⑥の理由について次のようにまとめました。

【A】～【C】に当てはまる言葉をそれぞれ文字数に従って【Ⅱ】の文中からぬき出しなさい。

サプリメントとして直接コーラーゲンを摂っても、【A】(二十文字)、その一部がコーラーゲンの生成へ、そして残りが【B】(十文字)に使われるため、摂った分だけ【C】(九文字)から。

(9) 「a」～「e」に当てはまる言葉の組み合わせのうち、正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア	a	ところで	b	なぜなら	c	ゆえに	d	しかし	e	けれども
イ	a	さて	b	つまり	c	だから	d	しかも	e	ところで
ウ	a	しかし	b	なぜなら	c	だから	d	だが	e	あるいは
エ	a	ところが	b	すなわち	c	そこで	d	しかし	e	なぜなら
オ	a	または	b	つまり	c	しかも	d	さらに	e	もしくは

(10) — 線部⑦で「別の観点」から話題を取り上げるために筆者はど

こに目を向けていますか。次の【 】に入る言葉を【Ⅱ】の文中から七文字でぬき出しなさい。

*筆者は【 】に目を向け、改めて自分の意見を述べている。

(11) — 線部⑧の状態になってしまう理由として合っているものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 学校では、教わったままの情報そのまま活用されるという機会が多いから。

イ 学校では、実生活の様々なバリエーションをカバーできるだけの学習の時間がとれないから。

ウ 学校では、知識を詰め込むよりも、情報を活用させる基礎体力を身に付けさせようとしているから。

エ 学校では、インプットされた情報を引き出すというアウトプットの訓練にかける時間が少なすぎるから

オ 学校では、日常生活に密着した雑談を交えながら知識を吸収させることに、価値があると考えているから。

(12) 大野氏が言う——線部⑨の言葉がどのようなことにつながるかと筆者は考えていますか。それを最も表している言葉を【Ⅱ】の文中から八文字でぬき出しなさい。

(13) ——線部⑩のような姿勢だと筆者はどのような問題が生じると考えていますか。【Ⅱ】の文中の言葉を使って三十文字以上四十文字以内で答えなさい。

(14) 「知の体力」について筆者の考えを次のようにまとめました。
A } F に当てはまる言葉をそれぞれ文字数に従って【Ⅰ】と【Ⅱ】の文中からぬき出しなさい。

知の体力とは、 A (五文字) された情報を B (四文字) な情報に置き換えられる C (四文字) の基礎体力のことである。
そして、知識の習得以上に大事なのが D (六文字) である。
なぜなら、それは E (十六文字) を学ぶことにより F (九文字) を知ることにつながるからである。

(15) 本文の内容にふさわしいものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 知識を応用可能にするためには、それが作り出されたプロセスを理解するだけでよく、知の体系を再構成することは不要である。
- イ 大学教育の本来の姿は「わかっていることを教えることであること」を教える必要は全くない。
- ウ 最近「わかっていること」だけでなく、「まだわかっていること」も十分に述べられている教科書が多くなってきている。
- エ コラーゲンを増やすためには、サプリメントよりもまい肉を食ったほうがはるかに理にかなっている。
- オ アウトプットの方法を持たない情報でも、仕舞われていれば知識としての価値がないとは言い切れない。
- カ 生活上では基本語として三〇〇語あれば間にあう。ただし言語生活をよく営むためには、だれもが三万語から五万語、修得すべきである。
- キ 現実世界で問題が生じたとき、勉強した知識、情報の総体を動員し、それにどう対応するかを常に考えることが大事である。